水上 勉

鳥たちの夜

(上)

鳥たちの夜

(上)

水上 勉

鳥たちの夜（上）

一九八四年一〇月二五日　第一刷印刷
一九八四年一一月一〇日　第一刷発行

著　者　水上勉

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　出版部（〇三）二三八―二八四二
販売部（〇三）二三〇―六一七一
製作課（〇三）二三八―二九六四

印刷所　凸版印刷株式会社

定　価　一一〇〇円

© T. MINAKAMI, Printed in Japan, 1984
ISBN4-08-772503-0　C0093

著者との了解により検印を廃止いたします。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

鳥たちの夜 (上)

＊

目次

夜汽車 7
京の片隅 29
伏見東柳町 71
雀たちの闇 121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

たんぽぽ 137
千種区東明町 165
南信濃栗山郷 201

装画　渡辺淳

鳥たちの夜

(上)

夜汽車

改札口を入って、木田はくみ子をふり返った。静脈のふくれた青白い顔を、くみ子はちょっと会釈させただけで出口の方へ歩いてゆく。駅前のマーケットへ寄って帰るにしては、そっけない背中だなと、木田は思った。だが、そんな背姿を見せるのは、はじめてではなかった。ここずうーっと、くみ子は木田に心をひらいていない。理恵が家出した昨年の夏末の一日から、くまの出た下瞼のしわをふかめだし陰気なヤツだ、と己が妻を、そんなふうに眺める時間が多くなった。出発は翌朝でもよかったが急に予定をかえて、夜汽車にしたのも、ひとつは、不機嫌なくみ子の相手が重くるしかったからだった。娘の居所はわかったが、何をしているのかわからない。それを何やかや、ああでもなかった、こうでもなかった、と、むかしのことをほじくりだして、家出の因も木田に九分の責任があると、いいづめにしてきているのである。木田は、線路をわたって、上り線のホームに立った。駅前広場が見えた。くみ子は背をまるめて小さくなっていた。ずいぶん老けたな、と思った。

理恵が東京のどんなところで働いているか、行って見てのことだが、ひどい所にいるなら、縄でももくくって、つれ帰ってこい、というのが、くみ子の昨夜からのいいつのった言葉だった。話によっ

てはそういうことにもなろうけれど、ちゃんとした所に勤めているなら、それはそれでよいのである。縄でくくりつけるのは、行ってからの話だ。木田は、娘が都会の泥にまみれて生き喘いでいると、決めてかかっている妻にへきえきしてきた。

駅前に人影はなかった。西陽が遠山のてっぺんにわずかに残照をのこしていて、町家が黒い板をしいたように見える。空はなすびいろにかげり、汽車のくるまでのわずかの時間だが、小きざみに、空は色をかえて、夜になってゆくけしきが、潮風のかげんもあって、ちょっと気分を滅入らせるのである。

木田はスーツケースを足もとに置いて、しずむ気分のうら側で、もう一人の自分が、生気をとりもどしているのを知っていた。期限をきめない旅だった。娘に会うことも大きな宿題だが、会わねばならぬ相手はまだほかに五人いた。男二人、女三人。みな教え子だ。この連中も、居所こそわかっているが、何をしているのか消息はわかっていなかった。木田には、この五人の子らも娘と同様に、不安と希望をもたせて、いま共通の立場で、自分を待っている気がするのである。

ジーゼル車が入ってきた。木田は、三、四人の勤め人が降りるのを待って車内へ入った。

「よお」

ガラ空きの車輛の隅から男の声がした。磯山のはげ頭が光って、こっちへこいこい、と手まねきしていた。

「どちらへ」

通路をへだてた座席へスーツケースを置きながら、

「京都や」

と木田はいった。四月までいた富田中学で同僚だったこの男は、木田が退職する一年前に辞め、い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

まは、電力会社の小浜出張所の嘱託で、広報をうけもっているときいた。絵が好きで、若狭一円の漁村風景を、在職中に三百点の油彩にして、やめる直前に個展をやり、その画才が買われての、電力会社入りだった。給料もよいとみえて、辞めてから服装も若返った感じで、頭こそ光る一方だが、景気のよさそうな、脂ぎった顔がまばゆかった。

「あんたはどこかいね」

「わたしゃ、東舞鶴や……」

磯山は、向かいにすわれ、と空いた席をたたいた。ガラ空きの車輛なので、はなれてすわるのも気がひけた。ケースは置いたまま、向きあってすわる。

「何てこともないんだけどね、家におっても、むさくさするし、宿題になっていた子供らに会いとうなって……」

木田はいった。磯山は、膝のあいだでしわくちゃにしていたベレー帽をかぶった。タバコをだして、

「子供って……」

「ほら、いつか、いったでしょうが……むかし、集団就職でわしらが世話した子ですよ」

「ああ」

磯山は、そんなことを話しあったことがあったな、と半分くらい思いだした顔で、

「どうかしたですか」

「どうかしたわけでもないんやが……気にかかる子がちょっぴりおるもんやでね」

「ほう」

百円ライターで磯山は紙タバコの先を大きく焼いて吸いながら、一本どうかとさしだした。木田はタバコはやめている。鼻先で手をふった。

「わたしはやめた」
磯山はポケットにタバコをしまい、
「何ぞいうてきたて」
「いうてきたわけでもないんだが、こっちの方に会いたい気持ちがつのってね……」
木田は、くわしいことを磯山にはなす気分にならなかった。いえば、この男はわらうかもしれない。四十年の勤務を終えて、ようやく恩給生活に入った。その在職中、頭をはなれなかった宿題を果たしに、いまごろ、思いだしたように、自前で会いにゆく子供らであった。中には、数年も音沙汰せず、親を心配させている娘もいた。いや、その五人のほかに、わが娘も家出して仲間に入った。
「まあ、それが口実でね……ちょっと、都会のかわりようを見たい気もして……ぶらっと……あてのないようなあてのあるような」
木田はそこでわらって見せた。すると磯山は暢気なことをいっているな、といいたげに、眉根をよせ、
「いそがしゅうて、このところ、スケッチにもゆけん、野暮用が多うて」
という。
「あんたのそんなあてのない旅はうらやましいわな、木田さん」
半分は、べつのところに思いのある眼でわらった。
「増設炉のことでですか」
と問うと、
「公聴会もすんださけ、ひとときの騒ぎはおさまったけんど……お客さんもふえてのう、猿島へばいかされて」

と磯山はいった。猿島に一号炉、二号炉あわせて出力二百万キロワット近い原子力発電所が出来たのは八年前になる。さいきん、三号、四号の増設話がおきて、話題をまいていた。広報係といっても、会社が月に一回出しているＰＲ誌のカットを描いたり、神社や仏閣の案内記など書いて、磯山はそれに載せている。毎号送られてくるので、木田も眼は通していた。おやと思うような、足でさがしあてた古い社寺の、まだ知られていない縁起など、よく調べているのに感心もした。そういう仕事をして収入になる新しい職場への意欲に磯山は燃えているのだ。木田には、そんな磯山が、退職後は百姓にもどるか、役場へ出るかぐらいしか仕事のない教師の老後に、新味をもたせていることに、魅かれている。

「あんな小さな半島に四つも原子炉ができて大丈夫かいの」

木田は、子供のような質問だな、と思いながらきいた。

「そら一つくわえこんだら、二つも三つも同じことやでなァ」

と磯山はいった。

「けど、数がふえれば、それだけ危険率もふえるやろ。わしら素人にはわからんことやけども」

「そういう意見はある。わしかて、三号、四号はよそにまわした方がええとは思うけんど、このあたりで、土地条件のことを考えるとやっぱり、あこしかないのんとちがうかな」

磯山は、タバコを消すと、ちょうど、窓のけしきが、話題の猿島が遠望できる入江にさしかかっているのに気づいて、

「きれいや。もう灯がついた。あんなに電気つけて……むかしなら、考えられんこっちゃ」

といった。漁火（いさりび）のように、沖に灯がついていた。原発コンビナートの宿舎の窓や外灯が、内陸側からみると、舟が浮かぶように見えるのだった。

「そうそう、猿島の寺のことしらべにいってわかったが……えらい人物をうんどることがわかってびっくりしたわ」
磯山は眼をかがやかせる。
「誰のことやね」
木田が問いかえすと、
「ダイセツ、ギザンいうてね。えらい坊さんの出たとこ」
大拙、儀山という禅僧の名は、在職中に何どかきいたことがあった。このあたりの出身だとはきいていたが、原子力発電所のある猿島だとは、あらためてきくことなので、
「ほう」
と感心していると、
「たった十七戸しかない半島の辺境から、大拙さんは、十七歳で、儀山さんは十五歳で家出して、岡山の曹源寺ちゅう寺で修行しなはった。大拙さんの方は、相国寺の管長に、儀山さんの方は曹源寺の老師になった、明治の初期のはなしや。……このあいだ遠忌のあった釈宗演さんはその儀山さんの弟子で、宗演さんも円覚寺の管長や。夏目漱石も参禅したぐらいの傑僧になってるし、若狭の猿島も、日本の禅宗史では重要視せんならん土地やいうことがわかってなァ」
磯山は顔をつきだしてきて、
「このところ、大拙さん、儀山さんのことさぐりにゆくと、年寄り連中でもそんなこと知っとる人はおらん。どっちも貧乏漁師の家の子やったというぐらいのことで、小っちゃい時の名もわからん。家出同然で村を出てしもうて……よそでくらした人やさかい、猿島の連中には、坊主になったぐらいがわかっとるぐらいで、それが、夏目漱石とわたりあう傑僧につながるえらい禅僧に出世しよるなんて

ことは……かかわりがないちゅう顔でなァ」
おもしろいことをきく、と木田は思った。磯山が何やかや古いことを掘りおこして、原子力発電所の広報誌に短文をのせているうちに、さぐりあてた人物史であった。大拙、儀山についての詳細は自分もくわしく知らなかったのだ。隣り町の高浜から出た釈宗演は、常治郎といったはずで、村を十一歳で出て、岡山の曹源寺で修行していた。それが、同じ郡内で、しかも、半島の突端の猿島の出身の先輩を追っての出家だとわかって眼がひらく思いだった。宗演のことは、たしかに、夏目漱石がノイローゼにかかった時に、何どか円覚寺で問答をした記録があるので、在職中にも漱石の好きな同僚が、その話をしてくれたことがあった。木田は、仏教にも、文学にもうとい自分をよく知っているが、若狭の辺境といってよい、半島や岬の小学校や、中学校を、長くて四年ぐらいの勤務で、転々してきた歳月で、教師間では終着駅ともいわれた猿島分教場だけはゆかなくてすんだ暦を一瞬、頭にうかべてみた。眼の前にいる磯山は、たしか、敗戦直前にその猿島の分教場にいた。自分よりは一枚上の猿島通であることも認めないではおれなかった。
「滴水という和尚の名を知らんかのう、木田さん」
磯山がきいた。
「知らん」
木田は首をふった。
「一滴の水で大悟した和尚の名前やが、儀山和尚に喝をくらって、一滴の水のありがたさを教えられたのがその人でのう」
「ほう」
思わず膝の手をずらせて、木田は顔をつき出した。

「何でも、滴水さんはまだ雲水で、儀山さんが風呂へ入っておられる時に、水を桶に入れてはこんだらしいねんやな。で、その時、桶ののこり水を、考えもなく、地面へ捨てたのを、儀山さんが、風呂の中から見とって、こらッ、馬鹿者ッ、一滴の水とて生きとる。殺生なことするな。木ィか草にかけてやれば、よろこぶものを……ごつい叱りようで、この雲水は、師匠のこの一語で悟ったそうな……一瞬の大悟徹底やな……」

「ほう」

「つまり、この滴水和尚の弟子すじになるのが宗演和尚いうわけで……滴水さんは天龍寺の管長にすわるし、宗演さんは円覚寺にすわった……猿島から出よった儀山という和尚は、どえらい師匠だったちゅうことがわかる」

「なるほど」

「ところで、考えるに、猿島の、貧乏漁師で、田圃も山もない、喰うに困るような家にうまれた子らが、汽車もないころに岡山までどないして流れていったか、そこらへんのことを調べてゆくと、どうも、臨済禅という世界は、学識も要るし、修行も要る宗派なのに、猿島からいった文盲の子がふたりとも、高僧の位置にすわるようになるうらに、何や秘密のようなものがある気がしてきて……おもしろくてね」

磯山はここで、退職後に見つけた職場が、木田たちにしてみれば、問題もかかえている原子力発電のPR誌の御用聞きのような仕事であるにしても、考えのもち方で、地面にかくれてきた大事な史実や人物の発掘の時間をあたえてくれるのがうれしい、といいたげだった。木田はそれをうらやましく思った。で、こういった。

「いや、まったく、わたしらは、教育者づらして、長年、子供を教えてきたけんども、じつは本当の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.